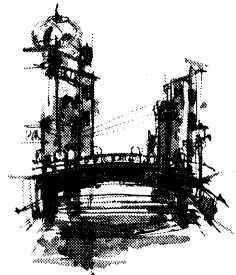


# 幼児教育に『哲学』を



周 郷 博

今頃は一ツ橋講堂にいて、日中文化交流の会があつてその中の北京科学シンポジウムの日本の準備会に出たんです。

で、岬君というのが非常に爆弾的な発言をしたんで遅くなつてしまいました。

彼がいったことは、支那の方も中国の方も、一九六四年に北京科学シンポジウムっていうのの第一回目をやったけれど、文化大革命でそのままやらないできているわけね。むこうも変わってきているわけだけれど、ある人は政治的な問題としてなにか発言したらいいというように考えているんだけど、岬君の考えはそうじゃないんだな。科学シンポジウムというのは、科学とは、あるいは学問とは何かということをはっきりさせるということなんでね、そこに焦点をおいて考えなきゃいけないん

で、北京の方ばかり見てないで、日本の問題を本当に考えなきゃいけない。そうすると日本の科学とか学問とかいつてるけど、これは随分間に合わせのいいかげんなものなんじゃないか、ここが問題なんだ、というのが彼の意見なんですよ。

ぼくはそれに賛成なんで、日本に大学ができたたり幼稚園ができたたり、みなさんなにか学問してるみたいな気がしているけれども、あれはやっぱり根本的に考えなくちゃいけない問題だと思います。ぼくは科学なんて言葉に弱すぎるけど、科学とは何かということ、児童心理という、まあ科学か学問か、それはいったい何であつたかということを根本的に考え直さなきゃいけないんだ。生半可な知識で物がわかつたような気がしているのはいけないんだ、ということを考えているわけです。

で、根本は何か、学問とか、科学とか、哲学とかいふもの  
なければ、やっていることに意味が出てこないわけです。物質  
とか実利とかいふもんじゃなくて、思想といつてもいいんだけ  
ど、人生観とか世界観、哲学とかがはつきりしてくると、我々  
の身のまわりが変わってくるんだ、とこの間から考えているん  
だけだ。

ヨーロッパの人は、きょう、あすのことだけを考えているん  
じゃないんですよ。物事を根本的に考えています。日本人はな  
にか間に合わせばかりやる。そしてこう小器用にね、その時代  
に合ったようなことをいいながらね。たえずいろんな単語を輸  
入してきちゃね。ぼくのところへ変な許可を頼みに来たんだけ  
ど、ホームルームのなんとかを作るんで、ぼくが訳した「どう  
したら幸福になれるか」の中の文章を引いてさ、あれを出すこ  
とをお許し願いたいなんてね。考えてみたらホームルームなん  
てなんだろうね。あんなことをいってれば新しい教育がわかる  
気がするんだね。なにか新語を覚えてればかっこうよかったり、  
なにか思想をもってるか、哲学をもってるかのような感じがし  
てるんだね。これは間違いです。

イザヤ・ペンダサンは、それは日本人はソロバンというのが  
世界中で一番うまいんだね、あれで鍛えたんで、日本人がもつ

ている言葉というのは、語呂盤というやつで、ソロバンはじく  
みたいになにか新語をもつてくると、うまく、どういう方法  
ではじき出すかは知らないけど、変な、こう間に合わせの結論  
をもつてくる。そして次の時代になったら、次の結論を語呂盤  
で出してくるんだそうだ。そういつてますけどね。

今、日本にないのは哲学なんだけれども、アメリカも哲学が  
死んでしまったんで、教育もごったがえした状態です。でも日  
本と違ったところは、批判する精神があります。日本人みたい  
に、体制順応でずるく構えてるんじゃない精神がありますよ。

人間とは何かということも、教育とは何かということも、本  
当に既成概念で、つまり日本人が覚えている言葉で、解決の道  
がみつかるなんてことはないんです。大文字で EDUCATION  
と書くんだねーそしてそれを見つげ出さなきゃいけないところ  
へ来ているんです。今までの惰性で教育を考えてちゃいけない  
んだね。大文字の教育にかかわりのある教育を見つげ出し、そ  
れを作っていくということが、現代の教育の哲学というものの  
中核にある問題だ”というのは、フランスのガストン・ミアラ  
レの言葉だけれども、現代の哲学の問題の中心は教育の問題で  
ある”というのは、スーザンヌ・ランガーの考え方です。アメ  
リカの女の人です。

今度、四月から使われるようになった国語教科書を見ると、字が多くなりましてね。漢字も多くなりました。しかし、ぼく、それをふっと見ましたらね、おもしろくないんですよ。字を教えれば教育だと思ってるんだな。これはまた、随分古くさい考え方です。そして、この教科書の文章の中に、哲学も科学も、文学もない、ということをはくは感じました。これは、日本の教育に哲学も文学もない、ということとひとつづきです。あるのは技術なんです。技術じゃ、死んだ知識を覚えさせるというだけです。そしてそれをテストするんです。だからぼくは、小学生なんかあの教科書を見て、そして先生の顔を見てると、学校なんか来るんじゃないかと思ってるんじゃないかなと思います。

こういうのにくらべれば、フランスの国語教科書とか、ロシアのだって中国のだって、やっぱり哲学がありますよ。国語というのは大事ですよ。ロシアの一年生の教科書の一番初めに出てくるのは、「レーニンはいかに学習したか」というのです。日本の明治天皇にあたるのがレーニンです。つまり、中教審の人間像と違うんだよ、本当に生きていた人間を指導者として出すんです。

まえにぼくが書かされた本の中に引用しているけど「狼オオカミと表

刈る人」なんてのは哲学があるんです。それは、百性が表を刈ってたら狼オオカミの中から出て来て、百性が食ってるパンを見て、随分うまそうなものだけど、どういふ風に作るんだ”って聞くんだけ。まず、前の年に畑をたがやすんだ。それから種をまくんだ”なんていうと、狼オオカミが”そんなまだるっこいことやってるんなら、オレはすぐ食えるものが欲しいんだ”ってね。その最初のところで百姓が、人間というものは、働かなければ食えないものだ”というのが出てくる。哲学もあるし、文学ですよ、これは。人間とは何か、を語っています。

しかし現実の日本の人間は、すぐ食える物が欲しいらしい。もはや狼オオカミになってるんです。畑をたがやして、種まいて、それからまた待つてなきやならない。それから次の年になってだんだん伸びて、それが黄色くなつた時に刈って、それを干して、今度は、粉にひく。実に面倒なことだけど、それだけのことをやって、人間はやつと食うことができるようになるわけです。ところが今の子どもたちはどうですか。狼オオカミに近くなってない？そして、ぼくらがそもそも狼オオカミになってるんです。

きのう、教育学科の先生たちと話して毛沢東語録を読んだんです。ぼくはね、これをおとしロンドンのハイドパークで、英語を買ったんだけど、今年日本語のやつを買いました。

これを読んでたら、いいねえ、っていうのはちょっとじゃわからないんだ、ちよつと読んだだけじゃなんとも思わないんだ。これはわかりいいから、よくわかるのを二ついうからね。ぼく、毛沢東語録の宣伝にきたんじゃないよ。(笑声)

世界中、哲学ってのは大きくわけて二つになっちゃったわけです。一つは分析哲学、言語分析です。人間が使っている「言葉」が、本当かうそかということを実証する、というのが分析哲学、すなわち論理実証主義です。フランスのリクールやなんか、構造主義という中で言語の問題を非常に大きく問題にしています。人間は言語というものをもっているけれども、ただ惰性で使っているんじゃないんで、言語というのは道具と似てますから、この道具が間違っていたんじゃないもできないわけです。

もう一つは実存主義です。これは現象学から出てきて、ハイデッカーやサルトルの実存主義というものになつていて。これは人間中心で、これが悪くなると自分中心になっちゃう。日本で実存的になるっていうのは、自分の悦楽にふけていることなんです。それをまあ、エゴイストといつてもいいんだね。しかしエゴイストってのはもう少し立派なものなんだ。シモーヌ・ベージュがいつてるけど、善悪をこえることが必要です。し

かしね、今の人間は善悪の下に落ちちゃったんで、善悪がわからないで自分の欲望にふけているんだ。まあ、こういう風に哲学がなっています。そして教育に必要な人生の哲学というもの、あるいは宇宙論みたいな大きなものの中に、自分の位置づけができなくなっています。それに比べると、毛沢東語録なんか哲学もあるし心理学もあるんです。

それで、毛沢東語録だけど、平凡な言葉でいつてるけど、実に、あとで胸があたりたまってきてわかるという言葉です。

「わからないことや知らないことは、下の者に聞くようにし、軽々しく賛成、または反対してはならない」

わからないことや知らないことは、下の者に聞くようにするんです。幼稚園でこれやってごらん下さい。必ずよくなると思うから。そして、軽々しく賛成しちゃいけない。子どもがうまいことをいった、なんておだてちゃ増長しちゃうからね。(笑声) 軽々しく反対しちゃ、なおいけないんだ。だって反対されれば、子どもはもう考えたっておもしろくなくなってしまう。その次は「我々は決して、知らないのに知ったようなふりをしてはならない」

実に、何でもないようだけれどね、こまかな、人間が変わってくるような感じですよ。今の日本では、知らないのに知ったふり

をして、そのごまかしでおるんだな。それからカギがあつて、  
「下問を恥じない」下の人に聞くのを恥としない、とカギに入っています。「下問を恥じないようにし、下級幹部の意見によく耳を傾けるようにしなければならぬ」なんでもないようだけれども、耳を傾けるように書いたんです。

「まず、生徒になつてから先生になる」初めから先生になつちゃダメなんだ。

「下級幹部の言葉の中には、正しいものもあれば正しくないものもあるから、聞いた上で分析を加えなければならぬ」これを幼稚園の先生と子どもの関係で考えてごらん下さい。子どもがこんなことをいった、「子どもは本当に神さまみたい」そんなこといってちゃだめなんです。正しいこともいってるし、間違つてることもいってる。子どもが何かいった時に、必ず耳を傾けなきゃいけない、そうしなきゃ彼は成長しないんだ。

「下からくる間違つた意見にも耳を傾けなければならない」

「頭から聞こうとしないのは間違つている」

「それに批判を加えるようにする」

というのがこの一節です。幼児教育の原理も、会社経営も同じように、こうすれば幼稚園がいきいきとしてくるはずだ、とぼくは感心しました。

もう一つ、これは三行しかないけれど実にいい。今の日本の社会のようになつちゃうと、非常に複雑で、なにか一つのことだけでえらく興奮しちやうて全体が見えなくなっちゃうんです。

「世の中のことは複雑で、いろいろな面の要因によつて決まる」毛沢東はここに三行でいっています。

問題は一面から見るのではなく、いろいろな面から見なければならぬ。幼児教育だって、六領域とかカリキュラムばかり見ただってダメなんです。いろいろな要因があつて複雑なんですから。我々は、全体を見ることがはるかに離れましたね。全体をいつまでたつても見ることができないのは、人間のおろかかというかもしれないけれど、我々が一面しか見ていないことはたしかでしよう。

人間の、全面的な能力を發揮するということが、人間の喜びです。一面的な知つたかぶりでも、世渡りはできるかもしれないけれど、もっと生きがいのあること、自分一人だけじゃなく、まわりの人も生きていくことに意味を見いだすようにするべきです。こういう意味で、毛沢東語録を読んでいると、中国には哲学があるし、これは詩みたいなもので文学があります。

ヨーロッパのいろんな国が、共産圏もいっしょになつて出ている雑誌で、「全面発達とは何であるか」がとり上げられてい

ます。ぼくは、全面発達というのは、労働するということと、芸術がわかるということだと思えます。毛沢東は、

「我々は無私の精神を完全に学ばなければならぬ」

とっています。これをイギリスのティヤール・ド・シャルダン協会の会長、ジョゼフ・ニーダムが聞いて、キリスト教社会主義を信じている我々としては、この考えに拍手喝采せざるを得ない」とっています。

中国全体が無私の精神を学んでいるんで、それが文化大革命なんです。無私な精神とは、芸術が本当にわかった時にそうなるんじゃないかな。音楽が本当にわかった時、本当にわかって涙がポロポロ出てきた時は、人の物を欲しがるといふ気持はなくなるね。ほしがりません、勝つまでは「なんていったってダメなんで、おのずからほしくなくなるんです。それが今の教育にはない。欲のかたまりになってしまつて、テストで何点になつたとか、どこの幼稚園に入つたとか、まತ್ತたくうつるなことを自慢してるんです。それで今、中国は全体的に生き返つて、日本はアメリカの真似をしすぎて頭が変になつちやつたんです。この状態では、どうしたつて気抜け人間になつちやうと思いません。

日本はどうしても企業家の国です。この間シンガポールから、

シンガポール大学の教授で経済学の人、華僑です、がきて話したことを覚えているんですけど、エコノミックアニマルとはもういわないんです。それでは間に合わなくて、モンスターというそうだ、怪物ですよ。エコノミックアニマルというのは、パキスタンの、当時外務大臣だったブットという人がいったんですけど、シンガポールの方では、いつでも軍国主義になる危険をもっている、という意味でモンスターというのだそうだ。

しかし、まわりがそういう風であればあるほど、我々は幼児教育からでも建て直さなければならぬ。できそこなつたおとなはしょうがないよ。森で新しい木を育てなきゃならないから古い木は倒れていく、そういう風に幼児教育を考えることは、他のどんな問題よりも重要なことだと思ふ。

ラッセルがいつてるとおり、先生やおかあさんが、心理学とかフロイドとか生半可な知識でわかつたように思つて、子どもを自分の手段にしようと思つてる。しかしなんとなく不安になつている。この気持が子どもにも影響を与える。おかあさんから、その不安をとりさらなくてはいけない。もっとスパツと「これ、いけないんだよ」とちゃんといえ、子どももよくわかる。なんだかきげんとしてごまかしてみたいでは変です。ところが、せっかく生まれてきたけど、おかあさんの気持があれこれゆら

いでいるらしい、しょうがないからアイスクリームでも買ってもらって、一時慰めておこう、ということになる。

確信をもっているが、毛沢東語録みたいに、子どもに聞いてごらんさい。変な策略で聞いちゃだめ。おかあさんは本当にこれを聞きたいんだ」といってごらんさい。そして子どもの意見に簡単に賛成したり反対しちやいけない。そうすると子どもは変わってきますよ。

知識じゃなくて、あることを勉強したら「心理学としてここだけわかったけど、まだわからないところがある。しかしこれは、私の今までの感覚やなんかで補っていかなければならない」とそう考えて、まず自分の物にしなればいけない。そして、子どもの方へ向かって行くべきです。自分の心がにごっているかぎり、それが子どもにも影響を与えているんです。ぼくは去年の暮からそういう経験をしているんです。

子どもに話をする、チビに話すのは、実にぼくはおそろおそろするんです。このごろの子どもたちうるさいだろ。だけど、今年の修了式の時、父兄と、父兄の友だちが、バイオリンとチェロを持ってきて、モーツァルトを四曲やったんだ。それも、ごちそうを食べつくして、子どもは受持の先生と別れなきやならないんで甘えちゃってバタバタしてるでしょ。モーツァルト

なんか始まったらうるさくなるだろうと思ってたら、非常に一生懸命でうまいんだな、シーンとしちゃったな——。

おとなたちが、本当に何かやってる姿は、子どもたちを感動させるんだ。子どもの方なんか見てないし、ごきげんとりなんか一つもやってないんだ。そしてそのあと「螢の光」をやったんだな。すると今度一年生になる女の子が、泣いている真似をして、その内に泣き出しちゃったんです。ここがおもしろいんです。子どもは、まずからだでおとなの真似をします。そのうちに、その行動にともなっている心までできちゃうんです。

これに比べて、電車に乗っているおとなを見たってなにか変な顔付きしてるんだな、自分のことしかわからないで、欲深く行動したあとのうつろさみみたいな顔してるでしょ。(笑声)そして、テレビを見てごらんさい。おとなのやってるのは悪ふざけばかり、子どもがよくなりっこないですよ。おとなたちが真剣に生きていることを子どもたちに見せなきや、見せるんじゃない、おのずから見せる結果にならなきや。

四月になって新しく入ってきた子どもたちに、ぼくは一つ詩を朗読しようと思った。「おとなというものは、ヘンなことを考えているんだ。おまえたちはまだチビだけど、今聞いたってよくわからないだろうけど、覚えとけ」というんでやろうと思っ

たけど、うしろの方のおかあさんたちがね、あまり興奮してる  
ようなので止めたけど……。でぼくは、あんたたちは、三年か  
四年たつて足もよく歩けるようになったし、目もよくなったし、  
手も働くようになった。電車に乗ったら席をさがすようなこと  
をやっちゃダメだ。立ってなさいといったんだ。ぼくがそう話  
したら、子どもがシーンと聞いていたそうさ。そして子どもの  
顔がよくなったそうさ。うれしさが表われてきたんだそうさ。

「座席ばかりさがしている子どもは、この幼稚園の子じゃない  
んだ」といったんだね。それから何日かたつて幼稚園にきてね。  
「ぼくきょう立つてきたよ」と報告してきたよ。

ぼくはちつとも子どものごきげんをとってないけれど、誠意  
をつくしてます。幼児教育の問題は、本当にぼくら、まじめに  
考えていきたいと思えます。

ヨーロッパで幼児教育というのは、十九世紀初めにキンダー  
ガーデンというのを、ドイツのフレーベルが考え始めました。  
しかしフレーベルというのは、宗教的な神秘的な思想をもって  
いた人です、宇宙論みたいな。

そのあと二十世紀の初めに二人います。一人はベルギーのオ  
ヴィド・デュクロリーという人でお医者さん、もう一人はイタ  
リーのマリア・モンテッソーリ、これもお医者さんです。この

二人は幼児教育なんて簡単なことじゃなく、人間というものを  
生物学的に理解しようとしたんだ。ピアジェだってそうです。

ピアジェは、アルプスの生物を調べてた人で、生物のうちの人  
間を理解しようと思って、「人間を理解するには子どもを理解し  
なければ」というんで子どもの研究をやってるわけです。目  
的は、人間とは何かということをやアジェはやっている。知的  
な活動とは、どういう風にして言葉とか認識とか、人間がもつ  
ている能力が、子どもの中にどういう風に作られていくか、と  
人間を理解するためにやっている。

モンテッソーリとデュクロリーは、一九〇七年にモンテッ  
ソーリは「子どもの家」、デュクロリーも同じ年に小さな塾マタを作る  
んです。彼はまだ若いじぶん、四十にならないころ、しかし子  
どもといっしょに暮してたら、人類の未来というものの、教育と  
いうものを考えざるを得ない状態になって、塾マタを作るんです。  
そして二人とも、生物としての人間、を問題としているうちに、  
人間の子どもの成長と、その子どもたちのサイコロジとを理  
解しようということにきたんです。心理学の知識から子どもの  
生理とか、生物的な姿を勉強してるんじゃないんです。

フレーベルについても、フレーベルは子どもの遊びというこ  
とと、子どもの保護ということを主として考えた。子どもは神



の子であるというルッソーの考え方、子どもの自然を大切にすると、  
というふうな考えだ。しかし、十九世紀の初めにフレーベルが  
考え始めた考えを、知識としてあとの人はもっているわけで、  
フレーベルの考えを、「おとなが子どもにおしつけている」とい  
うことになるんだそうだ。つまり、遊びが大事である。子ども  
は守られていなければいけない。子どもの自然な成長を大切に  
しなければいけない」ということを自分で感じて、ここで発見  
したんじゃないかと、それを「知識としてもっていた」のではない  
か、というわけです。今、フレーベルがこの時代に生きて  
いたら何をやるか、を考えなければいけない。

一九二〇年ごろから、ロマンティックな時代じゃない科学、  
技術の時代になって来た。デュクロリーなんか、アブノーマルな  
子どもからノーマルなものを学ぼうとしている。日本は、初め  
からノーマルな子どもだけを相手にしている。この二人は、ア  
ブノーマルつまり精薄とか身体障害とかいう子どもから、ノー  
マルな子どもを理解しようとしてやっただけです。

デュクロリーの考えたことを簡単にいうと、「教育について語  
るということは、まず、何よりも小さい子どもについて語ると  
いうことだ」そして、「この小さい子どもというのは、すべての  
民族がもっている、基本になる資本なのだ」といっている。ま

た、小さい子どもの教育について語るということは、未来につ  
いて語るということですよね。デュクロリーはその未来の方向  
ということに大きな興味をもって活動していた。未来のための  
個人、未来のための人類ということの、なみはずれた重要性を  
本気になって考えた。

次に、「我々は、この子どもたちを、生まれて間もない初期の  
時代に、特に助けなければならない。けれども、子どもを教育  
するといつて、そういう言葉を使って、おとなたちのディフォ  
ルマシオン、おとなのみにくい姿、いやらしさ、できそこなっ  
たおとなというものの、ウィルス(ばいきん)を子どもたちに感  
染させてはならない」私は教育をやつてますといいながら、お  
となたちのいやらしいウィルス、ばいきんみたいなものを、子  
どもたちにまきちらしているのがいます。

現在日本で考えるべきことも出ています。野原と小川の流れ  
と森、これは何千年、何万年と人間の環境として存在してきた  
ものです。デュクロリーは、子どもの教育のために必要なこれ  
らは、どんなほかの物よりも大切だと考えたんです。森や川や  
野原で育った方がいいんだ。そういうところでおとなの労働を  
手伝うということ、それはどんなことよりもすぐれた道徳教育  
になった。人間らしい感受性の教育になったといっている。

次に、小さい子どもの教育で、何か知らないということは、意味のあることだといっています。最もいい教師は、知らない教師だっているんです。誠意があり熱心だと、熱心な無知な人の方がいいんだって。皆さん安心したでしょ。無知ってバカという意味じゃないんです。そういう先生といっしょにしていると、子どもたちが何かやる気を、好奇心というものが、生き生きと出てくるそうだと。

そしてデュクロリーにとって、教育というのは次の二つの言葉に集約できるという。彼が考えた教育とは、考えることと、やるということ——行動すること、である。遊びも、何か作ることも、お手伝いもすべてこの二つである。そしてこの二つは、子どもにとって先が長い、ずっと先の目的、人類の未来というものに対して自分が何かの役割を果たしているということなんだ。これはフランスの戦後の教育改革を行なったランジュヴァンという人もワロンも、この教育の考え方について共感しています。

もっといいことは、デュクロリーにとって、教育の仕事というのは、科学と芸術の両方のことよってなしている、といっている。生物学までを含んだ科学と、一方では芸術的タッチ、芸術家のもっているような能力、この二つが教育を成り立たせ

ているんだと考えたんです。

日本人は、科学といえば技術だと思っちゃってるよね。科学というのは、自然と人間、宇宙と人間でもいい、この関係をどうつけるかというのが課題です。それを技術にしちゃって、日本人は科学はわからないっていている。そして教育も技術になっちゃった。そうじゃなくて科学—科学と芸術なんです。

そしてもう一つ彼は、教育という仕事の基本的相対性 *relativity* ということをいっている。つまり、教育というのは、こちらがどういう態度で出るかによって、向こう側が変わってくるというのです。教育という学校があつて子どもに教えるのじゃなくて、ここにいる人間、おとなたちがどうかということによって子どもにだけ問題があるのじゃなく、教師に問題があり、社会にも問題がある、これを相対性といつたんです。デュクロリーについて考えることは、特に公害が多くなり、大都市、過疎現象があつて、どんどん自然が破壊されて子どもの世界から遠ざかっている時、非常に必要なことだと思います。

モンテッソーリについては皆もずい分興味をもっているけれど、この人の考えたことは、そう皆にはわからないんじゃないかな。モンテッソーリの考えたことは、まさに自学、フレールベールみたいに保護しているんじゃないかと、子どもに訓練を課すわ

けです。自分でやりとげさせる。子どもに甘くない。自分の力で成長させ、自分の個性のないものを、自分で発見させて伸ばしていくという訓練の場を、与えているんです。

モンテッソーリは学校、デュークローリは学校というよりも、ワクをはずして教育を考え直さなければならぬといっているけど、二十世紀の始めにモンテッソーリは、学校とは、非常に広大な広がりをもった、人間研究の「フィールド」である、と考えているんです。そしてそれは教育的なクリニック、治療の場所です。この教育的なクリニックというのは、その重要さから考えれば、どんな教科目の寄せ集めと比べてみても重要だ。

つまり教科目だけ教えこめばいいんじゃないなくて、人間というものを体験する「フィールド」です。そこで、人類の文化が実際に見出だされていくところの「フィールド」であって、ここで人間とは何か、ということの研究しあって、「種としての人間」と、「社会的単位」フランス人とカロシア人とか、としての両方の面での人間が、もっと、より完成したものになっていくことを目的とした「フィールド」である。モンテッソーリは、最初に書いた「教育学的人間学」の中に、学校というものをこういうふうに書いています。随分日本と違います、日本では東大に入る階段だと思っている。むしろは、人類をもっと完成してい

く、つまり「種」として一動物に比べた人間という「種」それからいろいろな民族として、人間がより完成した姿になっていくことを願って研究している「フィールド」なんです。研究ばかりでなく、クリニック（治療）の場所です。

で、ぼくはやっぱり日本の問題として、我々のこの環境、自然破壊も含めて、お金さえあればどうでもいい、なんでもやれると思っている状態も、日本人が、偉大な「思想」、あるいは「哲学」、「人間観」でものをもち直ささえすればかわってくると思う。そしてこの「思想」の中核に小さい子どもたちの教育が入れば「鉄くずが磁石でパツときれいなパターンになるように」そういう事態が生じてくると思います。（みどり会研究会講演）